報告

豊後の台場について

小野英治
（会員　弥生町井崎）

佐伯史談会の日帰り県内研修は四月十三日、幕末に築かれた台場見学を主目的に実施した。天候に恵まれ運転士を含め総勢二十名は予定どおりその目的を達成できたと思う。

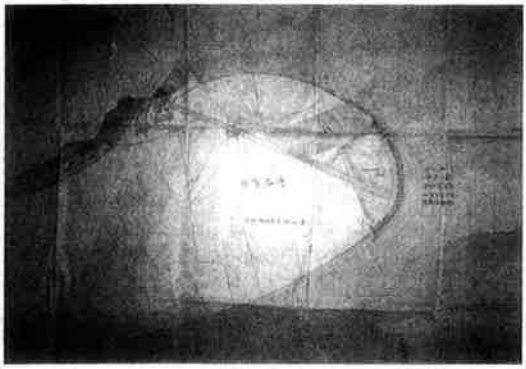
今回は遺構のある臼杵二ヶ所、杵築一ヶ所を見ていただいたが、機会があれば江戸幕府が築造した東京品川台場は完全に二ヶ所残っているので見ていただきたいものである。

幕末に海に面した諸藩は外国船の来襲に備えて台場（砲台）を築き大砲を備えたが、これは広義には城であり、江戸幕府の一国一城令は無意味となっている。

豊後は小藩分立で佐伯・臼杵・府内・日出・杵築藩が海に面し、岡・森藩も飛地として海港をもっていたが海岸線の短いためか、佐伯・臼杵・杵築藩以外は台場の築造はなかったようである。

なお、肥後領の飛地である佐賀関には下浦に二ヶ所台場が築かれていた。島原領の飛地も豊後高田に豊州陣屋を設けて豊前・豊後二万八千五百石を支配していたが、台場は築かなかったものの領内宇佐郡佐田村では賀来惟熊（かくこれたけ）が佐田式大砲を耐火レンガ製反射炉により完成。島原藩は領内全域から梵鐘を供出させ協力している。佐伯藩もその指導を受けて二十二門鋳砲したといわれる。

佐伯藩にお

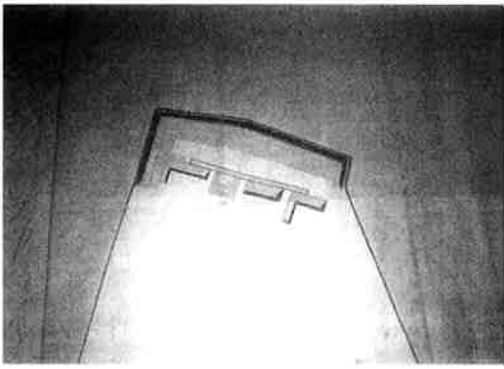


佐伯女島台場古図（現在消滅）

書に三ヶ所の計画が一ヶ所になったことがわかる。

『私領分豊後国佐伯海邊え異国船渡来の節は大嶋の内字水ヶ浦入津浦の内寅ケウト屋形嶋の内字沖ノ嶋と申所右三ヶ所臺場相用候心得の場所弘化元辰年正月十七日御掛阿部伊勢守殿え絵圖面相添御届申上置候右三ヶ所の場所未臺場出来不仕候然ル處今般自国海岸防禦弥厳重相備候様被仰出の趣も御座候付當時合不取敢右三ヶ所の外別紙絵圖面の通女嶋新田え臺場一ヶ所築建申候此段御届申上候以上

九月廿七日　毛利伊勢守（毛利藩史料）』



臼杵洲崎台場古図（現在石垣と土塁が残る）

この添付図に、臺場見通一里程女嶋新田、臺場惣間数六十五間半、砲門十五ヶ所、高サ水底ヨリ一丈六尺、惣坪数六千百五十坪』とあって遠浅の海に面する部分のみ土塁で文久三年（一八六三）完成試射をしている。後に御浜御殿と別称されていたが、戦前旧海軍航空隊建設で取壊された。建物は城下山際の坂本邸に移築現存している。

なお、臼杵藩では七ヶ所、杵築藩でも七ヶ所築造したが、薩長以外実戦に使用されていないのは周知のことである。

幕末に築かれた台場を全国的に調査して六月末頃には『城郭・陣屋・要害台場事典』（東京堂出版）が発売予定で、私は豊後・日向を担当したので御一読いただければ幸いである。

【注】幕末当時の大砲の射程距離は一五〇〇メートル。ペリー艦隊が使用した艦砲は一五〇〇～一七〇〇メートル（『幕末海防史の研究』・原剛・昭和六十三年）。